

年末年始の心急かされるもろもろに取り紛れているうちに2020年はもう24分の1が過ぎ去りました。メメントモリ(死を覚えよ)の言葉が絶えず去来していました。昨年6月に妹が旅立ち、その後も、夫の親友山本牧師、叔母のようだった友人和子さん、学生時代からの友人鶴飼さんが逝去され、悲しみが続きました。けれども、彼らはキリスト者として生きる喜びを存分に味わい、天の故郷へ帰って行かれたと実感していますので、彼らの信仰に教えられ、慰められてきました。

昨年10月、クラスメートが重篤に陥り、友人と二人で病床を見舞いました。彼女は原因不明の病気に罹り、次第に弱り、誤嚥性肺炎になり、病院に運ばれ、人工呼吸器を装着し、ベッドに拘束されていました。うつらうつらとしておられました。私たちの言葉は理解できるようでした。私にはお祈りするほか、何もしてあげられなくて、ごめんねと彼女に言いました。彼女はクリスチャンではありませんが、私がクリスチャンであることは知っています。彼女に「苦しみがないように、穏やかに過ごせるように、守ってくださいと、神様にお祈りするわね」と約束しました。彼女は頷いてくれました。この祈りが聞いてもらえるが、私は不安でしたが、この日以来、私は彼女の平安を毎日祈り続けてきたのです。昨夜、彼女の訃報が届きました。友人が穏やかに死を迎えられたことを知りました。

さて、クリスマスにはいつも楽しみに待っているお手紙がドイツの友人イネスさんから届きました。そのお手紙の中に、不思議な数行がありました。彼女は11月末に教会で非常に興味深いコンサート、イギリスの作曲家 Karl Jenkins (1944-) のレクイエムを演奏したとありました。ラテン語のミサ曲の中の5曲を日本語で歌ったというのです。大冒険だったと書いてありました。ローマ字で丁寧に歌詞が書いてありましたが、意味が分かりません。さっそく CD を注文し、聞いてみましたが、正確に聞き取れませんでした。いろいろ調べているうちに、Jenkins はアディエマス (Adiemus) というユニットで沢山の作品を発表していること、日本でも人気があることを知りました。イネスさんが歌ったのは俳句だったので、しかも辞世の句でした。

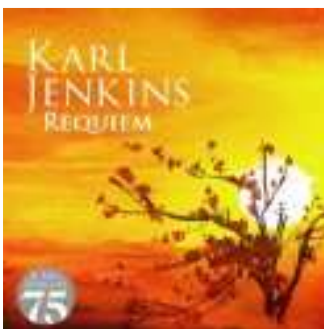
花と見し 雪は昨日ぞ もとの水(越谷吾山) The snow of yesterday that fell like cherry blossom is water once again.

心から 雪美しや 西の雲(小杉一笑) From deep in my heart, how beautiful are the snow clouds in the west.

人魂で 行く気散じや 夏の原(葛飾北斎) Now as a spirit, I shall roam the summer fields

月も見て 我はこの世を かくかな(加賀の千代) Having seen the moon, even I take leave of this life with a blessing

まめで居よ 身は習わしの 草の露(爪木晩山) Farewell, I pass, as all things do, like dew on the grass



Jenkins は父上の死を記念してこのレクイエムを作曲したとされています。日本人の辞世の句を取り入れて、そのまま日本語で歌っているのです。この5曲は静かな曲想ですが、レクイエムは大部の曲で曲想は様々でした。Jenkins は人生や命を、草花や水のように見なして、簡潔にわずか17音節で表現するいにしへの日本人の心を印象深く感じたと言っています。句の英訳も解説のパンフにありましたので、海外でも俳句は関心を寄せられ、親しまれているのだと思われました。

俳人たちは自らの死を思った時にも、自然の理、美の流れの中に自らを置いて、自然と一体化する喜びを歌っているように見受けられます。これが日本人の心情なのだろうと思わせられました。聖書も、人を野の花と関連付けて語っています(詩103:15/イザ40:6/マタ6:28 /ルカ12:27)。はかない野の花のような人間は、野の花のように精一杯、無心に生きたい。そして、死は自然の中に身をゆだねることもあります。また、神に求められ、神によって生まれ、神に帰るものであることを知っていれば、なお幸いです。私のクラスメートも祈りで神様と繋がっていると思いました。ちなみに最期に呼吸器をつけた父の絶筆は「主に在りて happiness」でした。父の言葉も私の心に深く残っています。